

世阿弥と蹴鞠

石井倫子

世阿弥が幼い頃から蹴鞠に堪能であつたといふことは、二条良基の書状(『自二条殿被遺尊勝院御消息詞』)にみえる「わが芸能は中々申に及ばず、鞠連歌などさへ堪能にはたゞ物にあらず候」の一節からよく知られてゐる。『申楽談儀』の中にも次のような記事がある。

世子ノ位、観阿ニ劣リタル所有、タレモ知ラズ、ト世子申サレシヲ、尋ネケレバ、「ワレハ、足利キタルニヨリテ、劣リタルト也」ト云々。

自分は足が利くために、父親の観阿弥よりは劣つてゐるというこの一文は、能の身体に関する世阿弥の志向の変化を知る上で非常に重要だが、この「足利キタル」という表現が、一、まりにまこと、いふ事

八条光親云、修理大夫顕季云、まりにハまこと、いふ事のある也。年わかきをりハ、身もかろく足もき、てふるまはる、おりハ、いかなるまりもあやまちなし。

おいの、ちハ、まりを我が物にして故ありてあぐるをまこと、いふ也。まことしらぬハ鞠にあらず。

一、ま里武士のこのむべき事
文章博士成光申云、ま里ハいくさの陣よりいできたる事也。武士を練ずとて、心はやく、身かろく、あしき、て、習はん料にしいだしたる事也云々。

のように、蹴鞠伝書で使われていることに注目したい(波線部筆者)。ここに登場する「文書博士成光」は、藤原明衡の孫。『蹴鞠口伝集』の撰者とされる難波頼輔(二三一六)とは同世代の人物であるから、成光の言葉は頼輔が直接聞いたものであつたのだらう。永正元年三月五日奥書、飛鳥井雅康(宋世)筆・細川六郎宛蹴鞠伝書『蹴鞠秘抄』(天理図書館蔵)にも

文章博士成光申云、蹴鞠は軍陣より出来

たる事也。武士を練ぜさせむと也。心早く、身軽、足き、て、しかも無病術也。という形で引用されているから、これは鞠足達の間では有名な言葉であつたらしい。

『口伝集』上・三四条には、

一、鞠の勝劣わかつ事

源九云、鞠足には徳どものある也。身の有様よくて鞠かゝるあり、一の徳なり。

又姿よからねども足のあたる、一の徳なり。又木の本によく立ちて乞ふべき所を乞ひて、足こまかにあらねども有様知りたる、一の徳なり。かやうの徳皆をかねてよきハ、別事也、少々もそなへたるを鞠足といふなり。

という記事があり、波線部からも「足が利く」事が上手な鞠足としての条件の一つであつたとわかる。蹴鞠は右足でまず踏み込み、次に左足で自分に蹴られた鞠の方へ身体を向け、最後に右足で鞠を蹴る、という三足(三拍子)が基本技術として重んじられた。このようにみると、「足が利く」という世阿弥の身体は、やはり、幼い頃に身につけた蹴鞠からの影響を考えるべきであらう。

ところで、世阿弥は身体レベルのみにとどまらず、伝書レベルでも蹴鞠からの影響を受けていたらしい。

彼は『花鏡』の中で、一日の能における序破急について次のように言及している。

序者、初めなれば、本風の姿也。脇の申樂、序なり：三番目よりは、破也。これは、序の本風の直に正しき体を、細かなる方へ移しあらはす体なり。序と申すはをのづからの姿、破は又、それを和して注する釈の義なり：かくて四番までは破の分なれば、色々を尽くして事をなすべし。急と申は、挙句の義なり。その日の名残なれば、限りの風なり。破と申は、序を破りて、細やけて、色々を尽くす姿なり。急の申は、又その破を尽くす所の、名残の一体也。さる程に、急は、揉み寄せて、乱舞・はたらき、目を驚かす気色なり：。

〔花鏡〕序破急之事

序破急とはもと、舞樂一曲の構成を示すために使われた概念であるが、やがて蹴鞠でも用いられるようになった。

三段と云ハ樂の序破急也。序分と云ハ、鞠も新しく、はためきて蹴悪し。身も未だたわかず、木のふるまひ、鞠の道も不審なればあらら□□にかけ枝にあひしらひて……お（よそ序力）ハ久かるべからず。仮令五分一許也。漸破□□て、木の難易、鞠の□存知しぬれば……曲を尽くし、足を残さず、入忠尽節、自他振舞無双の境に入り、感最勝の氣の乗て、鞠のどかに昇降すれば、声に色を添へて甲乙

あり。日既に晩に及て鞠静まり、人のかにおさまりて、数になれば、此時急分にて……おめきかけて、鞠長をひかへて、木にかけず、確かに譲り、のどかに蹴て、鞠数一両足に過ぎず、細やかに正しくて、其花を捨て、其実を取也。

（飛鳥井雅有「内外三時抄」）

これは、鞠会の時間経過につれての漸層的な変化を序破急で説明したもので、序で足慣らし的なプレーをした後、破では難度の高い技で「曲を尽くし」、急で鞠の上がる回数の記事をのばすという一連の流れは「花鏡」で世阿弥が説く序破急とも通ずるところがある。連歌の序破急に関しては、二条良基の

樂にも序破急のあるにや。連歌も一の

懷紙は序、二の懷紙は破、三四の懷紙は急にてあるべし。鞠にもかやうに待るとぞ其の道の先達は申されし。

（筑波問答）

が有名であるが、彼は「貞治二年御鞠記」の著者であり、蹴鞠にも強い関心を持っていた事が知られている。二十四歳の時難波宗清から与えられた問答形式の蹴鞠伝書「宗清百問答」中では、

一、鞠に序破急と申て、初め終り心して、蹴る様の候やらん、細かに申され候へ。

序と申は、鞠たけ高く、静かに蹴放ち候て、深く立ち入り候べし。破と申は、鞠

を木にかけ、面白く蹴候也。急と申は、数を上げ、鞠たけを木にもかけず、確かに人のもとへ渡し候。但、かやうに申候へども、近日は破の時、木にかけ数を上げ、急の時に狂ひたるがよく候也。

という鞠会の序破急について言及されており、

『筑波問答』の波線部をみても、これが良基の序破急論に影響を与えた事は疑いない。世阿弥が早くから良基の知遇を得ていた事実を考え併せると、彼が良基経由で蹴鞠伝書の序破急論を知り得た可能性は極めて高い。

一、見所の事。

見所なき蹴鞠興なし。古き上手の當時行足にかなはず。又古き上手を見たる人、又女房・僧あるべし。人の従者をのくべからず。下臈中々面白げに見る。興ある事也。

（成通卿口伝日記）

見所（観客）を常に意識しているという蹴鞠のパフォーマンス的な性格は、能とかなり近い。このような共通点があればこそ、蹴鞠の序破急論を摂取し、世阿弥が能の序破急論を作り上げることができたものといえるだろう。

世阿弥の能楽論には、他にも蹴鞠伝書からの影響がみられるが、紙幅の関係上、それらについては稿を改めて述べることにする。

（東京国立文化財研究所芸能部調査員）